令和2年度 第2回 出雲市総合教育会議 会議録

日 時：令和2年（2020）12月22日（火）15時～17時

会 場：出雲市役所 3階 庁議室

出席者： 出雲市長 長岡秀人

出雲市教育委員 水陽子
錦田剛志
金築千晴
内藤祐馬

出雲市教育長 杉谷学

出雲市副市長 伊藤功 （オブザーバー）

教育委員会事務局
教育部長 三島武司
教育部次長 松浦和之
教育政策課長 常松博雄
学校教育課長 金築健志
学校教育課主査 山本芳正
教育政策課課長補佐 常松晃好（兼書記）

15:00 開会

(三島部長) 只今から、令和2年度 第2回出雲市総合教育会議を開会します。開会にあたりまして、長岡市長がご挨拶申し上げます。

(長岡市長) 本日は、令和2年度第2回出雲市総合教育会議を開催しましたところ、教育委員の皆様には、ご多用の中ご出席いただき、厚くお礼申し上げます。

本会議は、平成27年の教育委員会における制度改革に伴い設置したものであり、本市の教育の課題や、あるべき姿について、私と教育委員の皆様が直接情報を共有しながら、意思統一する場であります。

9月に開催しました第1回会議では、「学校図書館の現状と今後について」、それから、「ICTの活用について」、特に、出雲市におけるデジタルファースト宣言の中で、これからの教育にどうやってICT教育を推進していくかという話をしたところでございまして、この2項目について活発なご意見をいただきました。

本日は、少し趣を変えまして、学力向上の取組の基本であります「学校の授業」について、主な議題として議論したいと考えます。また、教育委員会の皆様におかれましては、この1年間、様々な出来事がございましたけれども、1年間を振り返ってお話を聞かせていただけたらと思っているところでございます。

コロナ禍におけるこの1年というのは、不思議な年でございます。少なくとも歴史に残る1年ではなかったかと思いますが、迎える新年がどういう年になるか、全く予想ができない中でございますけれども、総合教育会議が、この1年を締めくくるにふさわしい会議となりますことを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。よろしくお願い致します。

(三島部長) それでは早速、協議に入りたいと思います。ここからは、本会議の設置要綱の規定によりまして、市長に進行をお願いします。

(長岡市長) それでは協議事項に入ります。最初の協議テーマであります「「めあてと振り返りを意識した授業スタンダード」出雲市版について」、事務局から説明をお願いします。

(山本主査) 説明

- ◇ 本市教委が作成した研修動画を視聴しながら解説
 - 研修動画：「子どもの学びの姿から授業改善を考える（平田小学校2年生算数科のモデル授業）」
- ◇ 市学力・学習状況調査結果から見える実態
 - 平均正答率、算数/数学における「思考力・判断力・表現力」の実態
 - 生徒の英語力の状況

(長岡市長) はい、ありがとうございました。この件について、委員の皆様方、ご意見を申し上げます。水委員さんはいかがですか。

(水委員) 率直に、私が大学で学んだ頃とあまり変わっていないという印象は受けました。それと、今見た動画がこの授業ひとコマすべてではないとは思いますが、「子どもの正解」ばかりを拾っていらっしやったので、逆に「子どもの失敗」を拾って、なぜそれが正解に導かれていかないのかという「過程」をみんなで考える機会があれば、と感じました。今、授業時数が限られていますので、そうしたことにひとコマ使うことができない、すごく急いだ授業になっているかと思うんですけど、正解にすぐに導く、あるいは、正解を言った子の意見だけを拾いあげていらっしやったような気がして、少し残念でした。

(金築委員) 私は、小学校の授業を久しぶりに見て、私の子どもの時と比べると、「めあて」などが視覚化されていて、子どもたちが流れをつかむ意味でわかりやすい授業になっていると感じました。

ただ、水委員おっしゃるように、正しい答えばかりで授業が進んでいたのだから、授業についていきにくい子もいたのではないかと思うんですけど、その子たちのサポートはされていたのかなと、その辺が少し気になりました。私が授業参観に行っていた頃を思い出しても、やはり、授業に参加していない子や授業に入っていけない子たちも結構いたので、そうした子たちのフォローはどうなっていたのかな、という部分が気になります。少しわかりにくい子たちもフォローしながら、皆が同じレベルになるよう進めていかなければいけないのかなという気はしました。

(長岡市長) ビデオ撮影があるということもあって、言わば、研究授業、公開授業と同じパターンですから、よいところだけを拾っているところはありますでしょうかね。

(金築委員) 模範、見本となる授業はそういうかたちなのかなとは思いました。他の学校なども含め、日常ではどういう授業をされているのかわかりませんが、ああいうふうに教えてもらうとちょっと嬉しいかなと思いました。

(内藤委員) 私は、娘の小学校の授業参観に行っておりますので、概ねあんな感じかなと思って見させてはもらいましたが、あそこまで熱血的にやっていただけならば、私も、その当時習っていたら面白かったのかな、というのが率直な感想です。

(伊藤副市長) こういう動画を作成して、こういう手法でやりましょうということをして先生方皆さんが共有するということであろうと思いますが、従来の教え方との違いがよくわからないので教えていただけますか。

(山本主査) 従来から、「めあて」をしっかりと最初に意識して、授業の終わりには「まとめ」と「振り返り」をやりましょうという授業はしていましたが、これまで教員の意識において「めあて」「まとめ」「振り返り」の定義が曖昧なところもありましたので、そこをしっかりと押さえるとともに、これから更に「主体的・対話的で深

い学び」を実現するための授業改善が求められていますので、全員で一緒に取り組むための「スタンダードモデル」を示したところです。

(長岡市長) それで、先生方皆さんこの授業を目標にきなさいということですか。

(杉谷教育長) 毎日授業をしていますけど、子どもにとってこの時間は何をした授業だったのかということをひとつずつ押さえていってやらないと、勉強しても今日何がわかったかということが残っていかないということですね。

そういう意味で、作成した動画の授業は、押さえるべきところをきちんと押さえていますし、子どもたちが自分の考えを自分の言葉でちゃんと伝えるということを訓練しています。

だから、動画では誘導しているところもあるかもしれないんですけども、子どもに自分の考えを自分の言葉で言わせて、授業の中に組み込んでいくということをやっており、「教員が一生懸命一方的にしゃべって教え込む」という授業のスタイルから脱却していこうというねらいがあります。

それと、研究授業的ではなかったかということですが、あのクラスは普段もああいいうクラスで、それはある意味教員の力もしれません。すべての教員が、ああいいうふうにやったからといって、そのクラスがああいいう授業になるかということ、それは違います。ベテランの先生が授業していますので、「ベテランだからできるんだろう」というところも半分あるんでしょうけども、ただ、若い先生も早くああなってほしいという期待を込めて、こういうビデオ作っているということです。

(錦田委員) 素朴な疑問として、大学の教育学部では、さきほどの「めあて」「振り返り」といったスタンダードな授業の仕方の演習は、なされていないということですか。

(杉谷教育長) まず、「今日何を勉強するか」と「最後にまとめること」が食い違っている授業が非常に多いです。そこをつなげてやらないと、今日これを勉強したな、というところに子どもがいかない、そこは難しいところですね。

この「めあて」「振り返り」というのは、国もそうした授業スタイルにしていこうということを言っているんですけど、実際、どのように進めていくかわかりにくいので、こういうビデオを作っているということです。

ですから、大学でもおそらく模擬授業なり教育実習でやられてきていると思うんですけど、そこは、やはり経験の差というところはあるかもしれません。

(長岡市長) 25年ぐらい前、私は教育委員会にいて、当時平田市内に小学校13校、中学校4校あった時代の話ですけど、学力テストで、学校、また、クラスによって大きな差があるということで、それこそ「学力向上」という中、亡くなりましたけど、今市の自治協会長もやられた武田先生が、当時50代の前後ぐらいでいらっしやって、武田学級は、市内の全ての教科でいつもトップだったんです。平均点は90点以上で、

それはもう圧倒的なものでした。7年間いらっしゃって、その間に、私は時々授業を見に行っておりましたが、別に、「熱血漢」ということでもなくて、淡々と、どこの学年に行ってもクラスをまとめてそのクラスは成績トップ、という不思議な人でありました。それが、当時スタンダードになかなかかなりえなかったという話ですけど、武田さんがやっていたらしゃった授業は、先ほどの動画の授業を、もう少しすっきりとわかりやすくされた授業ではなかったかと記憶しています。

余計な話をしましたが、それこそ、授業は時間配分が大事だということで、次の、「実際の授業の様子について」、事務局からお願いします。

(常松課長補佐) 説明

- ◇ 第一中学校3年生「外国語科」の授業の様子を動画により紹介
- 令和2年12月4日(金)3校時の授業

(長岡市長) いかがだったでしょうか。

(内藤委員) 私が習っていた時の英語は、ひたすら教科書を見て、テストで点を取るための授業だったような気がするんですけど、この授業では、会話もされていて、授業の中だけではなくて、社会の中でも役立てていけるぐらいの英語にまでなっているんだな、と感心をさせてもらいました。今後もこの取組をずっとしていただきたいなと思いました。

(錦田委員) 内藤委員さんと同じ感想を持ちまして、今日の授業は面白かったんですけども、私が関心を持ったのは、「教科横断」という言葉を言われていたところで、聞きなれない言葉だったんですけども、今回、人権の学習に絡めた内容であることで、冒頭から子どもたちにとって非常に入っていきやすかったのだろうなということを感じました。「教科横断」という言葉は、おそらく、専門用語なのかもしれませんが、「他教科との連携」は、大いに必要ではないかなと思ったところです。

もちろん、英語を学ぶということは外国の文化を知ることが目的のひとつにあるんでしょうけども、将来にわたって国際化していく中で、外国の言葉で自国の文化・歴史を語るということがとても大切になってきており、彼らの世代ではもっともそのことが試されると思います。

ですので、例えば、国語の授業や日本の古典なども、少し外国の言葉でも学びながら、海外の人に自分たちの文化や地域のふるさとの誇りをどのように伝えていくのか考える機会があると、より英語教育に深みが出てくるのではないかなと思った次第です。

その背景には、私自身体験したことがありまして、これまで、金融機関とか企業の人たちの前で、日本の神話やお祭りの文化、神社の話をしてくれ、ということで、よく頼まれて東京などへ行くことがあったんですね。なぜ彼らがそんなことを今学ぶのかというと、諸外国の人たちの方が日本の文化の真髄を知っていて、その人たちが英

語で聞いてきても、自分たちが答えることができない、国際舞台でお互いの文化を話し合いながら、お互いの文化理解につなげていくためのトレーニングをしなければいけない、ということで、私の隣に英語のスペシャリストがついて、私が日本語で講義したことを英語で翻訳していらっしやったんですね。

そういう体験もあって、戻りますけども、「教科横断」という言葉が非常に重要だということと、自国の文化、出雲の文化を外国の言葉で伝えていくという英語教育も、これから、深みを増していくためには大事ではないかなと思った次第でございます。

(金築委員) 久しぶりに英語の授業を見まして、新鮮というか、すごくレベルが高いことにびっくりしました。

最近では、小学校から英語の授業をされていますし、学校訪問をしたときも英語の歌のレッスンの様子を見たりしまして、早い段階で英語を学んでいくことはすごくいいことだと思いますし、私の時代は、英語の先生でも日本語的に発音していらっしやったような記憶しかないんですけども、今の子どもたちは、ネイティブスピーカーの方からちゃんと正しい英語を聞くことができ、すごくうらやましいなと思います。そういう中で、日本語をちゃんと勉強しつつ、英語をやっていくっていうことが大事なのかな、と思うところです。日本語も大事ですので、日本語の教育をしっかりした上で、英語学んでいってほしいかな、と思いました。

(水委員) とても楽しい授業で、私の子どもたちの授業参観に行っても今のような英語の授業は見せていただいたことがなくて、大変素晴らしいなと思いました。

ただ、やはり学力というのは、英語に限らず「国語力」だと私は思うんですね。英語を話すときでも、子どもたちも私たちも同じで、母国語は日本語ですので、頭の中で日本語を英語に変換しています。だから、日本語の文法をわかっているなければ英語を話すことはかなり難しい。今の動画の中で、子どもたちが授業で言葉を発するときを考えていますよね。それと、中学生なので「恥ずかしい」という気持ちもすごくある時期だとは思いますが、今、小学校でかなり英語の授業時数が増えてきますので、話したり、聞いたり、歌ったり、ということをもう少し学年が上がる前に、小さいときから経験しておくといいのかなという感想を持ちました。

最後に、1番目の項目の説明の中で、市内の生徒の英語力の状況の説明がありましたけども、私は、ぜひとも、出雲市内の中学生は、授業の一環で全員英検を受験していただきたいと思うんです。私の上の子は今高校生なんですけども、英検を受けようにも、部活動のある日に学校で試験をされていたために一度も受けられませんでした。下の子には、部活動を休んでもきちんと受けるようにということを言っているんですけども、やはり、ITもそうですけども、国際的な流れとして、英語を話す、聞き取るということは、これから必須な世の中になっていると思いますので、出雲市内の英語教育に力をもうすこし強くいれていただくことを望んでいます。

(伊藤副市長) 日本人が一番苦手な部分だと思いますけど、自分の考え、気持ちを表

現する、伝えるということ、英語の能力は別にしても、英語教育を通じて英語を勉強しながらできるようになれば、国語力も上がるだろうし、いい授業だなと思って見ていました。それが一番感じたことでした。

(長岡市長) 私たちのころの英語の授業は、本当に役に立つのか疑問を持ったものですが、楽しそうな英語の授業でした。先ほど、錦田さんがおっしゃったように、ビジネスの世界でも、他国のビジネスマンと比べると、日本人は自国の歴史や文化について知識もなく話ができないということなので、英語科をいろんな授業と絡めて、というのはいいことですね。明治政府が、一度全部英語に切り替える、と言ったときは大反対で、戦後もう1回チャンスがあったことと合わせて、今まで過去の日本の歴史の中では、英語社会に転換する機会を2回逃しています。言わば3度目の挑戦ということで、少しは、変わってくるのではないかと期待はしています。教育長、総括を。

(杉谷教育長) 私も、英語ができればいい、ということではなくて、やはり最初の動画で観てもらったように、まず日本語で自分の考えをしっかり持つことができ、それを人に伝えることができるという、当然、それがベースにないといけないと思っています。そういうことを、恥ずかしがらずに、というか、臆せずできる子たちにしていきたい。その上で、これから国際化・共生社会と言われる中であってもうひとつ、今で言うと外国語は英語なんですけど、それで発信できる力をつける、ということが必要かなと思っています。

1人1台タブレットの整備も進めておりますが、このツールは、やはり英語教育には非常に有効でありますし、授業の中にとどまることなくうまく活用できれば、外部の人とコミュニケーションを取る機会をより多く持つこともできるのでは、と思います。

算数の授業などについては、最初の動画でご覧いただいたようにしっかり授業をしてくださるベテランの先生が市内に何人もいらっしゃいますが、英語については、残念ながら、という言い方は少し先生方に失礼ですけども、今観ていただいた授業ができる教員は、彼女以外には市内で数人です。ですから、「今まで見たことがない」とおっしゃったのは、残念ながらそのとおりかもしれません。ただ、英語教員がああいう授業をできるようにしていくことが目標で、あの教員だからできる、ではなくて、ああいう教員が市内どこの学校にも育ていくということが必要だと思っています。

ですから、ツールはツールとしてあるんですけど、やはり「教員の授業力」というところは、一方ずつけていく必要があって、その指標として、例えば学力調査とか先ほどの英検とかというものがあるんだろうなと思っています。

ですので、私自身も「英語は書いて点を取る」という時代を通ってきていますけど、それプラス「話すこと」に力を入れてやっていくことが必要でありますし、また、「話すこと」だけしていればいいという話ではなくて、彼女の授業動画の最初でも言っていましたけど、話して、書いて、相手に伝えるっていうことが必要で、だから、話す授業だけを毎時間しているわけではなくて、やはり書くこと、読むこと、という

ところも力を入れている。その辺のバランスが取れた授業をできる教員の育成が大きな課題だと思っていますから、力を入れていかないといけないと思っています。

ただ、今日観ていただいて、少しいい評価をいただいたので、自信を持ってそういう教員育成に当たっていききたいなと思っています。

(長岡市長) ということで、そろそろ「まとめ」「振り返り」の時間としたいと思いますが、この1年間を振り返って、今日の議題も含めて、それぞれ委員の皆さん方から感想、意見、そして、市政に対する注文などをぜひ聞かせていただきたいと思えます。

(水委員) もうすぐ任期も終わるんですけども、最後の1年は、コロナの影響で本当に教育現場へ足を運ぶことが激減し、残念だな、という気がしています。

ただ、そういう中においても、そういう時にしかできない教育というものが学校現場ではなされていた、と私は思いたいのです。朝、小学生の登校の見守りに歩くんですけども、「3密」とか「ソーシャルディスタンス」とか一生懸命言いながら楽しく登校する子どもたちの姿を見ていると、この子たちの方がわりと冷静だな、と感じます。

誰もが初めての経験をし、この先どんな局面に出会うかわかりませんが、どんな場面でも「子どもたちはいつも大人を見ている」と、「学校でも先生を子どもたちが見えています」と、私はいつも言いたいんですね。

いつでも子どもは大人を見ていると思いますので、教育だけに限らず市政もそうですけれども、子どもたちが憧れるような大人でありたいと私自身もまた思いますし、市長さんもそういうふうにあっていただきたいと思っています。以上です。

(金築委員) 今年は本当に今まで経験したことがないコロナがありまして、子どもたち、教育現場もいろいろ戸惑っていたと思うんですけども、先ほど水さんがおっしゃったように、子どもは順応性があって、その生活にすぐ慣れて適応している感じはしていました。学童保育でも、きちんと手を洗って消毒をするということがルーティンになっていて、マスクも当たり前になってきています。

なかなか私も教育現場に行くことはないんですけども、ただ学童にいて保護者さんと接して思うのは、保護者さんにちょっと余裕がなくなってきたかな、ということです。親に余裕がないと子どもの落ち着きとかにも出てくるので、学習に対する取組などは、やはり家庭の心の安定があってのことで、それが無い限りは、どんな勉強をしても身に入らない、特に小さい子はそうだなという気がしています。

なので、保護者さんは出かける前にまず怒らないでねってということと、あと先生もなるべく怒らないでねって思います。そういった部分で、保護者の余裕がないということが一番いけないことかな、と思っています。今、国や県も「学童保育の延長」とか言っていますが、私はそれは反対で、延長ではなく働き方改革で働く時間をなるべく減らして、効率よく働いて、早めに子どもを迎えに来て抱きしめてあげて、それだけなんです。本当にそれだけしてくれるだけで、子どもの安定感も違うし、

落ち着きも違うなっていうことを実感しています。今、真逆の方向に向いているんじゃないかなという気がしていて、保護者のためにそういう利便を図るのはちょっと違うと思っています。待っている子どもたち、18時過ぎてソワソワしている子どもたち、その子どもたちのために、早く帰れるような仕組みを社会が作ってほしいと思います。なかなか難しいと思うんですけど、お母さんが笑っていることが一番望ましいと感じます。以上です。

(錦田委員) 私は、前回の総合教育会議でもお話したんですけども、今回のコロナ禍を通じて、「禍を転じて福と為す」と言うと不適切かもしれませんが、しかし、様々な学校行事や先生方の研修などを、いい意味で見直す機会になったと今も強く思っています。近隣の学校現場の方々や、教育を取り巻く方々とお話しする機会においても、皆さんそういうことを仰っていました。「本当に必要なものは何なのか」ということを、これを契機に十分精査して、今後の教育政策にぜひ生かしていただきたいということが一点です。

もう一点、少し気になっていますのは、「学習状況調査」の中で、「地域との関わりが希薄」ということと「学力」とが、どうも因果関係があるようだということ、それだけにとどまらず、「子どもは地域の宝」として出雲市民みんなで力を合わせて子どもたちの教育に力を尽くしているんですが、「地域との関わりが希薄」ということは、おそらくその子たちが出雲を担う人材にはならないのではないかと危惧を抱いておりまして、様々な生涯学習の機会を通じながら地域へどのように子どもたちを参画させていくかということを考えていかないといけないと思います。

また、お祭りを中心とする伝統行事への参加について、学校によってはちょっと及び腰になっているのではないのでしょうか。政教分離のことを考えられる方もあるかもしれませんが、地域の伝統文化を継承していくことは非常に重要であって、そここのところがどこか及び腰にならないように、地域の伝統芸能も含めて、地域が教育力を発揮する場所となるようこれからも維持してもらいたい、ということ今年1年強く思いました。以上でございます。

(内藤委員) 数ヶ月教育委員をやらせていただいて、やはり私は企業の実感で見えてしまうので、合理化を求めてしまうんですけど、ただ、今回、教育に関わらせていただく中においては、教育の現場というものは、合理化だけではなかなか押さえ込めないというところも見え隠れしましたので、合理化が必要なところはしっかり合理化していただいて、けども、これは人間の力じゃないとどうにもならないというところもしっかり押さええていっていただければいいのかなって感じました。

それと、タブレットが先生や子どもたちに配られる中で、教育の場で役立つことと役に立てられないことをしっかり判断してやっていかないと、現場の先生たちが今よりもっと困ってしまうかなと思いました。

私としては、まだ初心者運転というところでやらせていただいておりますが、慣れていけば、もっといろんな見方ができると思います。今回は、本当に勉強させていただいた数ヶ月だったと思っています。

(伊藤副市長) 春先からのことを考えますと、2学期が何とか無事にもう間もなく終わるということで、修学旅行などは影響が出たんですけども、子どもたちの健康などには影響がないうちに年末を迎えられそうだとということが一番ですね。

裏では、日々、陽性者がでないか、学校関係者がいないか、保育園関係者がいないか、と一喜一憂していました。結局そういう方がいなかったのも、少し安心はしていますけども、いろいろ聞くところによると、目立った企業の倒産やリストラとかはありませんけども、年明けから、生活不安、経済不安が、「子どもの貧困」といいますか、そういう子どもたちに悪影響を及ぼさなければいいかなということを願っております。以上です。

(杉谷教育長) 教育委員さん方からいろいろと感想をいただいた点は、本当に重く受けとめないといけないところがたくさんありますので、私どもとしては、何でもかんでも新しいところへ向かっていくということじゃなくて、やはり不易と流行があると思いますので、そこをちゃんと見極めていかないといけないなと思ったところです。以上です。

(長岡市長) 冒頭お話ししましたように、今年という年は不思議な年で、2月ごろから本格的にコロナウィルスで騒ぎ始めて、教育委員会では、学校を休業するかどうかという問題に直面し、時の総理の休業要請に逆らって、土日祝日を除くと16日の休業で終わったというのは、そのあと夏休み等の対応など学校の状況を見ても、あの判断はよかったなと思っております。

また、教育委員会にあっては、杉谷新教育長就任の1年でもありましたし、それまでの槇野教育長の流れをしっかり受け継いでいただいています。市の中でいろんな部局がありますけれども、この教育委員会というのは、気の休まる時にはない部署だと思えます。1万4千人の児童生徒、それに教員、それぞれが毎日生活している中では、いろんなことが起きます。その都度、さまざまな情報が寄せられ、マスコミ対応も含めて大変なストレスがたまる仕事だと思えます。平穩無事に何もなくて当たり前で、何かあるとすぐ総攻撃を受けるという立場でありまして、それから、かつてに比べれば、やはり保護者の皆さんのストレートな意見があちこちから飛んでくるということで、本当にご苦労な一年であったと思えます。

といって終わるわけではなくて、引き続き同じことが来年以降もあって、特効薬、ワクチンの話も出ていますが、一方では、イギリスにおけるウイルスの変異が報じられており、更に強烈になって出てくるという、これがいつまで続くのかというのが心配なところであります。

そういう中であって、私も来年4月はもう任期満了をもってやめるということになりますけど、4月16日まではまだ市長です。残った任期の中で、しっかりと準備や次に続く仕掛けをしておきたいと思っております。

1年間、教育委員の皆さんに本当にお世話になりました。これからも教育は続いていくわけで、おそらくがらっと日本の教育は変わっていくだろうと思えます。その辺

を委員の皆さまにはいろんな立場で見届けていただきたい。そして、率直なご意見をいただくというところが一番の皆さんの使命ですので、よろしくお願いを申しあげて、終わらせていただきます。事務局へお返しします。

(三島部長) それでは、以上で、第2回出雲市総合教育会議を閉会します。ありがとうございました。

17:00 閉会